

## 子どもも大人も中心に

青空が広がり、セミの鳴き声が響く夏の森に、今年も「流しそうめん」の日がやって来ました。流しそうめんといえば、竹を割ったものに水を流して……というのが一般的です

が、札幌トモエ幼稚園の流しそうめんはちょっと様子が違います。板を組み合わせて作った幅45センチ、長さ20メートルの滑り台状のものにビニールをかぶせて緩やかな斜面に設置し、そうめんを流します。

幅が広いのは、そうめんを食べ終わった後のお楽しみ、そうめんの代わりに人間が流れるためです。人が流れるときにはさらに斜面

宮武大和  
(幼稚園教諭)

の下までビニールを延長し、ゴール地点には組み立て式のプールの置き、スタートからの全長は40メートルのウォータースライダーとなるのです。

背中を押してもらってスタートすると、徐々に加速し、最後は勢いよくプールにドボン！ 大きな水しぶきと歓声が上がります。子どもたちはもちろん、大人も滑ります。ひとりで滑るだけでなく、親子や夫婦一緒だったり、5〜6人で連なって滑ったり、子どもたち以上にはしゃぐ大人の姿が見られ、滑っている人、見ている人、背中を押す人、みんな

宮武大和 (みやたけ やまと)

札幌トモエ幼稚園主任教諭。公益社団法人こども環境学会  
評議員。NPO 法人園庭・園外で野育を推進する会 理事。



なに笑顔が広がります。

子どもも大人も、やりたいと思つたときに自分

で一步を踏み出すことが大切との考えから、滑るのを誘いますが強制はしません。はじめは見ているだけだったり、滑るのを躊躇したりしていた保護者も、滑っている人の楽しい様子に触発され、「ぬれるのはハードルが高いと思つていたけれど、思い切つて滑つてみたら、気持ちよくて何度も滑つた」とか、「子どもにも戻つたような気持ちになれる」という声が聞かれます。

札幌トモエ幼稚園では

このような、流しそうめん



イベントをはじめ、日常的に保護者への園開放を行いながら、園庭での親子キャンプや、大人向けのゲームが半分を占めるレクリエーション大会など、園の生活の中に保護者が主役となり楽しむ要素や、保護者が子どもを理解する機会となる活動を取り入れています。

子ども時代に遊びの体験から学んで育ってきたという実感が薄い保護者は、子どもが遊びの中で学んで育っていくことを理解するのに時間がかかることが多いように思います。例えば最近では、子どものけんかをすぐに止めたり、けがへの過剰な心配や汚れることへの嫌悪、過干渉等、子どものやってみたいという気持ちを抑制するかわりが多く見られるようになってきました。また、子どもとの愛着関係をうまく結べないことに悩み、自身自身を肯定できずにいる保護者も増えていきます。

そうした状況の保護者に、子どもと同じように遊びを経験することで、心が解放されることや、子どもが成長する過程に欠かせない経験があること、わが子と体験を共有することで信頼関係が深まることなどを感じてもらうために、保護者も主役となる活動を積極的に取り入れているのです。

自身に経験が無いことを言葉だけで理解することはそう簡単ではありませんが、子どもと同じように、そうめんになって水の中にドボン！と滑るといふ「子ども体験」の取り戻しによって、子どもがワクワクしている気持ちや、子どもが遊びの中で学んでいることなどへの理解が深まっていきます。そうすると、子どもの興味や、楽しんでいる気持ちに共感できる保護者へと変化し、子どもの言動に対して否定や禁止が減り、子どもがより素直な表現をして生活できるようになっていきます。

園という場でそのような機会を積極的に提供していくことは、子どもに共感的な保護者へと成長を促し、その結果、家庭での親子の良好な関係が持続していくことで、生涯にわたって子どもの健やかな成長を支えることにつながります。

保育を語るときに、「子ども中心に」という言葉が盛んに使われていますが、「子ども中心」であるためには、大人が子どもをどれだけ受容できるかが問われます。大人にも心の余裕が無ければ、子どもを受容したり、成長を待つことが難しくなります。近年、切れ間なく伝えられる子ども虐待のニュースや児童相談所が扱う虐待相談対応件数の急増は、大人に余裕がなくなっている証左だと思えます。どんなに園での生活が充実したものだとしても、家庭の環境や保護者との関係性が子どもにとって心穏やかに過ごせるものな

ければ、子どもが健やかに成長することは望めません。

禁止や否定の言葉を多く受けて育った子とそうでない子との間には発達に大きな差が見られるといわれます。子どもには自ら考える力、自ら育つていく力があり、それを信じて見守ることができる大人の存在が必要です。そういった観点から考えると、子どもと大人は車の両輪で、「子どもも大人も中心に」考えることが重要だと思えます。「子ども中心」を謳うだけでは、子どもの権利を守りきれなくなっているのではないのでしょうか。園が保護者と積極的に連携し、具体的に体験を提供したり対話の場をもったりすることが必要な時代だと感じています。

2018（平成30）年の総人口に占める子ども（15歳未満）の割合は12・3%となり、

1982（昭和57）年から37年連続で減少しています。子どもが減り続けていくことで、さらに大人の都合が優先される社会になっていくのではないかと危惧しています。大人の管理下で生活することが多い現代社会の子どもにとって、最も影響の大きい環境は「大人」です。子どもは自分で環境を選ぶことができません。大人に対して意見することもできません。子ども中心を実現するために、いかに大人に向けて子どもの世界を発信し働きかけていくかを、より真剣に考えなければならぬ時代が来ているのではないのでしょうか。

幼児期は長い人生の土台となり、後から取り戻すことが簡単ではない重要な時期です。子どもの権利を代弁しながら、大人のドキドキ（心配）と子どものワクワク（挑戦）の橋渡しをして、子どもと大人どちらも支える、私はそんな保育者でありたいと思っています。